

第206回aacaフォーラム 「まちライブラリー」の取り組みと、その一例 「MUFG PARK / LIBRARY」

開催日:2024年8月8日

引率者:磯井純充さん、三菱地所設計 設計担当者
(大森さん、高橋さん、長谷川さん)

視察地:MUFG PARK / LIBRARY
(東京・西東京市)

フォーラム委員会

次世代を担う子どもたちの「体験格差」や書店の急速な減少が社会的課題として顕著になってきており、私たちはその解決を意識する必要に迫られています。第206回aacaフォーラムでは、「まちライブラリー」の取り組みに注目しました。「まちライブラリー」の取り組みを実践する場のひとつである「MUFG PARK / LIBRARY」(AACA賞2024・優秀賞)を会場とし、「まちライブラリー」の提唱者の磯井純充さんにその取り組みをご説明いただき、その実践の場として形づくられた「MUFG PARK / LIBRARY」を設計・監理者の三菱地所設計担当者に案内していただきました。



説明風景



熱弁する磯井さん

「まちライブラリー」は、個人や団体が家や店、病院などの一角に本棚を設置し、本を持ち寄り交換し、「本」を通じてコミュニティを作っていこうという活動です。

従来の図書館の主目的は「本の収蔵

と貸し出し」ですが、まちライブラリーは「本を媒介にした人と人の対話」を重視しています。例えば、誰かが寄贈した本には、その本に関する「みんなの感想カード」が添えられています。本の感想や寄贈した理由が共有されることで、その本は他の利用者にとって、単なる情報源ではなく個人の体験や思いが詰まった特別なものとなります。読書体験に個人のストーリー性を加え、地域住民同士のつながりを深めるユニークな仕組みです。

まちライブラリーは「本を通じて地域の文化や歴史を共有する場」の役割も果たしています。例えば、その地域にゆかりのある作家の本や、地域特有のテーマに関する本が集まることで、住民が地元の魅力を再発見する機会を提供しています。このような文化的価値の創造は、都市部だけでなく地方においても重要な意味を持ちます。

磯井さんは、「まちライブラリー」の活動のテーマとして、「顔の見える関係を取り戻す」「個人でどこまでできるかを追求する」の二つを挙げられました。「豊かなコミュニティは官に頼らない小さな規模の学び合い(学縁)から醸成される」という実践に裏付けられたお話には説得力がありました。「公は官の意味で捉えられるが、パブリックはPEOPLEのものという意味なのだ」という捉え方は、豊かな文化的環境を日本に創造していくために大切な視座となり得ます。

磯井さんには「個人的な活動こそが社会的な活動につながる」という想いがあるとのこと。「資本の論理＝組織の論理」が優先され「個の視点が看過」されている現代社会を批判的に捉え、「個」あるいは「小さい集団」の活動の積み重ねを大切に「まちライブラリー」を盛り上げてきた磯井さん。「大切なのは寛容性である」という優しさは、長年試行錯誤を深められたこそその眼差しと言えるでしょう。

情報通信と交通手段の発展により世界は近くなったものの、ネット空間に閉じ込められ、むしろ「個」に分断されてしまった現代。そんな今だからこそ、改めて、磯井さんが提唱する「『個』から始まるコミュニケーション」の在り方の模索が重要になっていることが、熱量のある語り口からひしひしと伝わりました。

本を媒介とした子どもたちの未来づくりや地域活性化の取り組みを知る今回のフォーラムは、参加者の皆さんにとって未来への橋渡しのために何が必要かを自分ごと化として考える良い契機となりました。

※「まちライブラリー」の詳細を知りたい方は、磯井さんの著書『「まちライブラリー」の研究―「個」が主役になれる社会的資本づくり』をご覧ください。

(委員長 萩尾昌則)



MUFG PARK / LIBRARYの説明の様子



MUFG PARK / LIBRARY全景